

# 中世末期におけるアンヴェルス国際市場の生誕（上）

J・A・ファン・ハウテ

中澤勝三 訳

## 【解説・解題】

以下に訳出するのは、ベルギーの歴史家J・A・ファン・ハウテの「中世末期におけるアンヴェルス国際市場の生誕」と題する論文で、1940年に雑誌『ベルギー歴史学・文献学雑誌』に掲載されたものである。この論文は、表題に示されているように、中世後期において具体的には14～16世紀におけるアンヴェルス（アントウェルペン、アントワープ）市場の生成と発展をヨーロッパ経済の枠組みの変化とネーデルラント地域経済の関係のもとに位置づけ、考察したものである。19世紀末以降に本格的に開始された近代的な意味でのアンヴェルス市場史研究の文献のなかで、筆者の見るところ、アンヴェルス市場の発展と衰退を構造的に研究した点で、決定的な影響力を与えた論文なのである。アンヴェルス史研究において、いわばそれまでの研究水準を一変させ、研究史上大きな分水嶺となった研究とっていい位置を占める。

ファン・ハウテは、ブリュッセルの生まれで、ルーヴアン大学を卒業し、長らく同大学教授を勤めルーヴアン学派の中樞を占めた。研究分野は、ブリュッセル、アンヴェルス両都市史の研究、ベルギー経済史で、中世から近代初頭にかけての都市史についての業績が多い。アンヴェルス経済史については、氏の門下生であるH・ファン・デル・ウェーによる『ヨーロッパ経済とアントワープ』（ハーグ、1963年、英語）という大著があり、それまでのアントウェルペン経済史研究の集大成的位置を占めているが、ファン・ハウテの歴史把握は、必ずしもファン・デル・ウェーによって乗り越えられてはいない、微妙な点で独自の構想把握をおこなっている、と訳者は考えている。

## 〔訳注〕

J.A.Van Houtte, 'La genèse du grand marché international d'Anvers à la fin du Moyen Age'.

*Revue belge de Philologie et d'Histoire*, 19, 1940, pp. 87-126.

「アンヴェルス」はフランス語。「アントウェルペン」はオランダ語、「アントワープ」は英語である。本論文はフランス語で書かれているので、表記を「アンヴェルス」で統一した。

著者ファン・ハウテの著作目録は、下記の論文集に掲載されている。Jan A. Van Houtte, *Essays on Medieval and Early Modern Economy and Society*, Leuven University Press, 1977, pp. 9-17. 但しこの論文集には、ここで訳出した「アンヴェルス国際市場の生誕」は収録されていない。

ファン・ハウテ学説の訳者による要約と位置づけについては、中沢勝三『アントウェルペン国際商業の世界』同文館出版、1993年、第1章を参照。

#### 〔凡例〕

1. 本訳では、分量の制約の関係から原論文の前半に相当する部分（87～127ページのうち、106ページまで）を掲載する。後半（下）は『人文社会論叢』第7号に掲載する予定である。
2. 原文では、ページ毎に注が掲載されているが、本訳では各節の末尾に一括掲載し、注の番号を、原論文とは違い節毎（印で節の境界を明記した）に通し番号とした（訳注も同様）。また、原注は(1)、訳注は で示した。
4. 本訳に掲載した地図は原論文にはないが、地理的位置関係を示す便宜上、訳者が掲載した。

#### 中世末期におけるアンヴェルス国際市場の生誕

中世末期の数世紀にわたって都市ブリュージュは、ヨーロッパ経済の中で一個の比類ない重要な役割を演じた。商業の復活がネーデルラント内に経済活動を引き起こさせるとすぐに、スヴィン湾は、その河岸に外国商人や外国航海者の一群が流入してくる第一級の土地となった。当初においては、ブリュージュ経済の地平は、北海、そしてある程度まではバルト海沿岸の地方より外に出ることはなかった。例えば、第一次原料の産地であるイングランドと、非常に発達した繊維工業を有するネーデルラントとで示した対照は、交易の活発な流れをつくり出すのに十分であった。13世紀に、このフランドルの港の顧客は拡大した。ドイツの沿岸諸都市は、ここに、フランドル市民の積極的商業（自ら出向く交易の意味、訳者）がシャンパーニュの大市から運び入れてきた地中海産物を求めに来訪したのであった(1)。その上に、やがて、この世紀末の四半世紀中に、北海にイタリア人船乗りが現れるに及んで、南ヨーロッパとネーデルラント、とくにブリュージュとの間の交通に、以前には見られなかったような強い関係が引き起こされることとなる(2)。13世紀末には、都市ブリュージュは、市壁内に、そこを起点として中世の偉大なる「世界市場」をかたちづくることになった三大市場を糾合させていたのである。イングランド人は、その地で、大陸の大生産地である繊維工業に糧を与える羊毛を販売し、そして彼らの故国の需要を満たすためにかなり多量のものを買入れた。イタリア人は地中海文明の上質な産物、とくに香料、高級織物、それにいくつかの高価な原材料を供給した。最後に、ドイツ人は、バルト海平原の穀物と並んで、ヨーロッパの大部分に対する糧食として欠かせないもの、つまり多くの原材料をもたらしたが、それらは高価とはいえないものであったとしても、西欧の産業の稼働にとっては一層必要なものであった。これら商業活動における三つの柱に、もとより、それらよりは重要性の劣る他の柱が加わった。ブリュージュは、ある種の隅の首石の役割を演じつつ、拡散した諸力を、中世の実際上の世界経済という機構の強力な束に結び合わせたのであった(3)。

この役割を、ブリュージュは、14世紀中と15世紀の相当な期間にわたって保持した。とはいえ、14世紀以降、衰退の兆しはその地平線に見え始める。この時期から、ゼーラントのワルヘレン島東岸部がその当時形成していた広い停泊地が活況を見せ、16世紀末までこの停泊地を見捨てることが

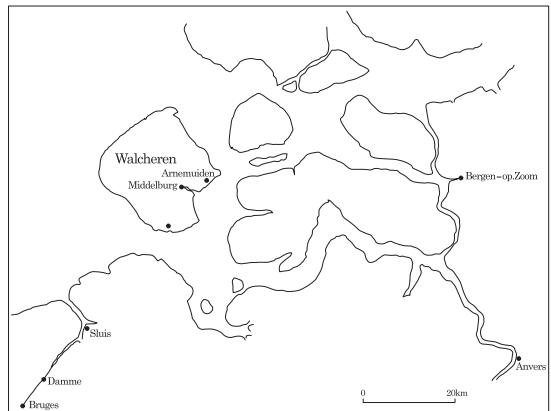
ない活発な交通が生み出された(4)。けれども、これらの事情が、ブリュージュの地域的性格を根底から変えたとは思われない。たとえ、商船がもはやスリュイスに、ましてやもとよりブリュージュには接岸しなくなったとしても(5)、そうだとするとやはりこの都市こそが商売の争いがたい中心地としてあり続けた。たとえ船乗りがミデルビュルフやアルデマイネに投錨しに行ったにしても(6)、にもかかわらず商人はブリュージュで商談をしたのだ(7)。ブリュージュの史料もこれと同じ状況を示しているが、これは古文書の保存の状態にのみ依るものではないと思われる。つまり、同じ状況とは、スペイン人が、おそらくはまたポルトガル人もまた、このフランドルの港を、彼らが以前それをおこなった以上に、15世紀に絶え間なく訪れるようになったという印象である(8)。1421年に、メディチ家がネーデルラントにその家の支店を設置したとき、彼らがそれを建設するのをブリュージュに決めたことはまことに当然のことであった(9)。ヨーロッパ経済全体のなかでこの都市の位置を決める他の諸要素が衰退に向かいつつあったことには異議を差しさむ余地はない。ドイツ・ハンザのブリュージュ商業への参加は、前世紀にそれが持っていたもの以上のものをもたらしたわけではなかった。けれども、こうした事態は、フランドルに起こった諸状況というよりは、他の諸国民、とくに北部ネーデルラント(10)とイングランドの活発な交易の発展にこそ原因があったものと思われる。こうした現象が - 14世紀においては、これらの地域の産物が広くスヴィンの河岸で荷おろしされたのではあるが(11) - バルト海沿岸の諸地域と東ヨーロッパ間の取引のかなりの部分をこの地方に引きつけることとなった。けれども、ハンザの経済的役割を持続させたのは、常にこのフランドルの市場を結節地として持っていたからである。だからこそ、ブリュージュは、この時期にあっては、ヨーロッパの主要な商業を会合させる点であるというその本来の性格を未だ失ってはいなかったと断定できるのである。

これとは反対に、15世紀末になると、経済の諸状況は、全くかわったものになりつつあった。この時点で、ブリュージュの没落は突如として加速化したようである。アンヴェルスがその後を襲い、世界市場の位置に上昇していった。この地歩を、アンヴェルスは、16世紀の大部分の期間にわたって保持しつづけた(12)。ブラバントの地歩は、まばゆいばかりの将来を持つことになるが、それは、フランドルのライバル(ブリュージュのこと、訳者)の荒廃の上に築きあげられたものなのである。それは、もはや地域的な意味しかもたず、奇妙な有為転変によって、奇妙にも14世紀のアンヴェルスのそれに似ていた。この時期には、このエスコーの港(le port scaldien)(アンヴェルス港のこと。エスコーはオランダ語ではスヘルデ(訳者)は、まことに世界的な利益を持つこともなく、イングランド羊毛のおかげで実際の重要性をかちえていた(13)。同様に、ブリュージュは、スペイン羊毛の輸入の主要港として残る。そして、このことのために、この国の領事館がその市壁内に維持されたのであり(14)、この半島の商人の一部がいたのであり(15)、また、おそらくは、ある種の金融活動があった(16)。この貿易の重要性についてはこれまで、この時代のわが国の情勢について、全体的な判断に立って十分考慮されてきたとはいえないけれども、このフランドルの都市経済に生じていた変化の本質を見あやまることはありうるはずもない。これは、大部分が15世紀末以降に起こったこ

とであったが、ヨーロッパ国際貿易の大きな流れに従事してきた数多くの船舶による、スヴィン河のその港（ブリュージュのこと、訳者）とその諸外港の離脱ののちに、つまり1世紀後のその繁栄の崩壊と、ライバルであるアンヴェルスの開花を完成させたのは、この貿易に従事する立役者の離反であったのである。

〔原注〕

- (1) H.ファン・ウェルフエケ、「中世フランドルの積極交易」『ハンザ歴史雑誌』61巻、1936年、7-24。(H. Van Werveke, 'Der flandrische Eigenhandel im Mittelalter', *Hansische Geschichtsbblätter*, t.LXI, 1936, 7-24)。(以下、初出に限り原著者名、表題等を原文で掲げる。末尾の数字はページを示す、訳者)
- (2) R・デュエール、「18世紀末から14世紀初めにかけての北海でのジェノヴァ・ガレー船」『ローマ・ベルギー歴史研究雑誌』19分冊、1938年、5-76。(R. Doehaerd, 'Les galères génoises dans la mer du Nord à la fin du XVIIIe et au début du XIXe siècle', *Bulletin de L'Institut Historique Belge de Rome*, fasc. XIX, 1938, 5-76)。
- (3) 以下参照。H・ピレンヌ、『ベルギー史』1巻、5版、262-265、ブリュッセル、1929年(H. Pirenne, *Histoire de Belgique*, t. I, 5e éd., p.262-265, Bruxelles, 1929); H.ファン・ウェルフエケ、『経済史 (R.ファン・ローズブルック編フランドル史、2巻)』191-218。(H. Van Werveke, *Ekonomische Geschiedenis (Geschiedenis van Vlaanderen*, publ. s. la dir. de R. Roosbroeck, t. II, 191-218), Bruxelles, 1937); R.ヘブケ、『ブリュージュの中世世界市場への発展』(D.シェーファー編、『交通・海運歴史論集』1巻 (R. Haepke, *Brügger Entwicklung zum mittelalterlichen Weltmarkt (Handlungen zur Verkehrs- und Seegeschichte*, publ. s. la dir. de D. Schäfer, t. 19), Berlin, 1903); F.レーリヒ、『中世世界経済。一つの経済時代の繁栄と終焉』(B.ハルムス編40巻) (F. Rörig, *Mittelalterliche Weltwirtschaft. Blüte und Ende einer Wirtschaftsperiode* (Lieler Vortrages publ. s. la dir. de B. Harms, fasc. 40), Léna, 1933)。われわれの考えでは、「世界」という意味は、著しく相対的な意味しかない。現在の表現で使用されるようなものとしての「世界」経済という表現は、「世界」市場のそれとおなじ様に、「既知の」世界全体に広がった通商関係という意味に使われる。この概念は何れの時代にも同じ抽象的な概念であって、それが対象とするものは地理的知識の状況に応じて変わることは明らかなことである。
- (4) Z.W.スネラー、『15世紀のワルヘレン島』(コトレヒト文学・歴史紀要、10巻) (Z.W.Sneller, *Walcheren in de vijftiende eeuw (Utrechtsche Bijdragen voor Letterkunde en Geschiedenis*, t. X), Utrecht, 1916); W.S.ウンガー、『交易都市としてのミデルビュルフ』(ゼーラント科学会編刊行物) (W.S.Unger, *Middelburg als handelsstad* (Extr. Archief, uitgegeven door het Zeeuwsch Genootschap der Wetenschappen), Middelburg, 1935)。
- (5) 港湾の観点から見て、ブリュージュは13世紀以降スヴィンの下流の地域と比較して控え目な地位に甘んじたことに注意しておきたい。A.デスメット、「スヴィン、ダム、ミュージェ、モニケレーデ、フッケおよびスリュイス諸港の起源」(『師弟によるアンリ・ピレンヌ記念歴史論集』125-141、ブリュッセル、1937年 (A. De Smet, 'L'origine des ports du Swin, Damme, Mude, Monikerede, Hoeke et Sluis' (*Etudes d'Histoire dédiées à la Mémoire de Henri Pirenne par ses Anciens Elèves*, 125-141), Bruxelles, 1937)。
- (6) アルネムイデンは、ゼーラントの都市であり、ワルヘレン島にあり、ミデルビュルフの東5キロメートルのところにある (右参考地図参照)。



- (7) 証拠としてはハンザの刊行史料を参照。K.ホールボウム、K.クンゼ、H.G.フォン・ルンドステッツ、W.シュタイン、『ハンザ史料』ハレ=ライプツィヒ、1876年から。10巻および第1分冊(K. Hohlbaum, K. Kunze, H.G.von Rundstedt, W.Stein, *Hansisches Urkundenbuch*, Halle-Leipzig, 1876-. vol. 10 et 1 fasc.);K.コップマン、G.ボン・フォン・デル・ロップ、D.シェーファー、『ハンザ判告書』、ライプツィヒ、1870年-1913年、24巻(K. Koppman, G. Bon der Ropp, D. Schäfer, *Hansereccesse*, Leipzig, 1870-1913, 24vol)。イングランド商人の場合は少し異なるが、われわれがこれからこの論文で見る個々の諸原因に関するものである。
- (8) J.フィノー『中世におけるフランドルとスペインの通商関係研究』(フランスのフラマン委員会刊行物)、パリ、1889年(J. Finot, *Etude sur les relations commerciales entre la Flandre et l'Espagne au moyen âge* (Extr. Annales du commite flamand de France), Paris, 1889);ポルトガル人については、E.ファン・デン・ビュッシェ『フラマン人とポルトガル人の関係覚書』、2版、ブリュージュ、1874年(E.van-den Bussche, *Mémoire sur les relations entre les Flamands et les Portugais*, 2e éd., Bruges, 1874)及びA.ブラームカンブ・フレイレ『フランドル商館覚書』(ポルトガル歴史学雑誌、1920年)(Noticias da Feitoria de Flandres (Extr. *Arquivo Historico Portugues*, 1920)。ゼーラントを頻繁に訪ねる人々としては、スペイン人とポルトガル人を欠かすわけにはいかない。ウンガー『交易港としてのミデルビュルフ』18-20。(文献再出の場合、数字は参照ページを示す。以下同、訳者)われわれが参照するブリュージュの史料は一部次のものによる。L.ジリオド・ファン・ゼーフエレン『ブリュージュ市古文書目録。第1部、特許目録、第1節13世紀』ブリュージュ、1871年-1878年、7巻(L.Gilliodts van Severen, *Inventaire des archives de la ville de Bruges. Section Première. Inventaire des Chartes, première partie: Du XIIIe siècle, 1871-1878, 7volumes*)。E.ガイヤールによる『フラマン語分析表、語彙集』ブリュージュ、1885年(*Table analytique et Glossaire flamand* par E. Gailliard, Bruges, 1885);『ブリュージュ指定市場古記録。この都市の国内・海上通商、国際関係、並びに経済史記録集』ブリュージュ、1904-1906年、4巻(*Cartulaire de l'ancien Estaple de Bruges. Recueil de documents concernant le commerce intérieur et maritime, les relations internationales et l'histoire économique de cette ville*, Bruges, 1904-1906, 4 vol.) ;『古指定市場の方式による、ブリュージュの大トン税表』[5巻 - 6巻]ブリュージュ、1908-1909年(*Cartulaire de l'ancien Grand Tonlieu de Bruges, faisant suite au Cartulaire de l'ancienne Estaple*, [t. V-VI], Bruges, 1908-1909);『ブリュージュにおける古スペイン領事の目録(1280年-1777年)』ブリュージュ、1901-1902年(*Cartulaire de l'ancien Consulat d'Espagne à Bruges (1280-1777)*, Bruges, 1901-1902)。主に民事裁判と代理の系列においてブリュージュ市の古文書に未刊のまま膨大な記録が残っている。
- (9) A.グルンツヴァイク『メディチ家のブリュージュ支店通信文』(王立歴史委員会刊行物シリーズ)(A.Grunzweig, *Correspondance de la filiale de Bruges des Médicis* (Publ., de la Commission Royale d'Histoire, sér. in-8),
- (10) H.J.スミット『アムステルダム交易の興隆(学位論文)』アムステルダム、1914年(H.J.Smit, *De opkomst van den handel van Amsterdam* (Diss.), Amsterdam, 1914.)。
- (11) E・デーネル『ドイツ・ハンザの繁栄時代。14世紀後半から15世紀末の四半世紀までのハンザ史』ベルリン、1905年-1906年、2巻(E.Daenell, *Die Blütezeit der deutschen Hanse. Hansische Geschichte von der zweiten Hälfte des 14. bis zum letzten Viertel des 15. Jahrhundert*, Berlin, 1905-1906, 2 vol.)。
- (12) J.A.ゴリス『1488年から1567年までのアンヴェルスの南欧商人(ポルトガル人、スペイン人、イタリア人)コロニーの研究。近代資本主義初期の歴史学的貢献』(ルーヴァン大学歴史学及び文献学会メンバーによる刊行物)ルーヴァン、1925年(J.A. Goris, *Etude sur les colonies marchandes méridionales (Portugais, Espagnols, Italiens) à Anvers de 1488 à 1567. Contribution à l'histoire des débuts du capitalisme moderne* (Recueil des Travaux publiés par les Membres des Coinferences d'Histoire et de Philologie de l'Universite de Louvain, 2e série, fasc 4), Louvain, 1925)。
- (13) J.デ・ストゥルレ『中世におけるブラバント公国とイングランドの政治的関係と外国貿易。ブラバントにおけるイングランド羊毛の指定市場とアンヴェルス港のハンザの起源』パリ、1936年(J.De Sturler, *Les*



*relations politiques et les étranges commerciaux entre le duché de Brabant et l'Angleterre au moyen âge. L'étape des laines anglaises en Brabant et l'Angleterre origines du développement du port d'Anvers*, Paris, 1936).

- (14) ゴリス『南欧商人』60-61。  
(15) フィノー『商業関係』250以下。  
(16) 16世紀における為替交換地としてのブリュージュについての言及。K.O.ミュラー『世界交易慣習(1480年-1540年)』(中世・近代ドイツ交易文書、5巻)(K.O.Müller, *Welthandelsbräuche* (1480-1540) (Deutsche Handelsakten des Mittelalters und der Neuzeit,V) Stuttgart-Berlin,1934.),全篇、とくに176、189、233そして240。

#### 〔訳注〕

アンヴェルス市場との対比で経済史上重要な意味を持つブリュージュ市場には、本論文刊行全の学説——たとえば外港との水路の砂埋化に衰退の原因があるとするR・エーレンベルクやR・ヘブケのいう「世界市場」——と違い、ファン・ハウテは、これにネーデルラントの「地域的」市場という性格を与えている。この点を本格的に論じたのが大戦後発表された次の論文である。'Bruges et Anvers, marchés 《nationaux》 ou 《internationaux》 du XIV au XVIe siècle', *Revue du Nord*, 34, 1951, 28-44. なお、戦後発表されたファン・ハウテのアンヴェルス経済史の総合的把握を示した論文として、'Anvers aux XVe et XVIe siècles. Expansion et apogée', *Annales. Economies, Sociétés, Civilisations*, 16, 1961を、また彼の学説に対する批判的見解を示した注目すべき論文として、W.Brulez, 'Brugge en Antwerpen in de 15e en 16e eeuw: een tegenstelling?', *Tijdschrift voor Geschiedenis*, 83, 1970, を参照。

ここでいう「フランドルの都市」や「フランドルの港」はブリュージュをさし、「ブラバントの都市」「ブラバントの港」はアンヴェルスを意味する。

フランドル、ゼーラント、ブラバントの錯綜した海岸線(今日とは大きく違っている)、ならびに本文中で指摘されている都市の位置を示すために地図を用意した(4ページ)ので参照されたい。これは、下記の文献記載のものをもとに訳者が作成した。W.Brulez, 'Les escales au carrefour des Pays-Bas (Bruges et Anvers, 14e-16e siècles)', *Recueils de la Société Jean Bodin*, 32 (1973), 419; R.Dochaerd, 'Handelaars en neringdoenden', *Flandria Nostra. Ons land en ons volk zijn standen en beroepen door de tijden heen*, I, Antwerpen-Brussel-Gens-Leuven, 1957, 377.

このような発展を引き起こした諸原因を解明するという問題は、わが国民史についてだけでなく、中世末及び近代初頭においての、ヨーロッパ全体の歴史にとっても、重要な関心を呼ぶものである。けれども、事実が、どれほど不可思議に見えたとしても、この問題は、今日に至るまで徹底的な検討の対象となったことはない。たしかに、この時代の商業の発展を扱った歴史家は、このテーマについて見解を表明してきてはいる。不幸にして、それらは、科学的な正当性を持たないことがままあった。すでに提出されている諸学説を批判的に検討すれば、これらの諸説の不十分さを明らかにするのに十分であろう、とはわれわれの考えることである。ひとたび不十分さが明示されたならば、われわれは、アンヴェルス国際市場の諸起源の問題に対して、新たな解決を見出そうとする目的を持ってわれわれの研究を押し進めることになる(1)。

ブリュージュとその外港が海と通じていた水路が砂で埋没したことが、フランドルからアンヴェルスへの商業覇権の推移についての伝統的な説明の主たる論点であり、もしそういいうるとすれば

隅の首石となっている。かつてフランドルの海岸はスリュイスと同じ高さで、深い海からの切れ込み、つまりスヴィンを見せていた。これが最初は船乗りをブリュージュの市壁下まで引き寄せたのである。それは砂埋化が進行しつつあって、その過程は、遅くとも13世紀以降には始まっていて、19世紀の湾の残りの部分を完全な護岸工事をするまでその影響を感じさせつづけた(2)。ブリュージュの最も光輝ある時代においてさえ、商船はダムで常に荷降ろしをしなければならなかった。そこからは船荷は交易の中心地まではしけで運ばれた。のちに、スヴィン河の下流が外海船で通過できなくなると、投錨地点がますます河口に近づいていった(3)。14世紀の後半以後河川の状態が急速に悪化していったのは明らかなことである。そしてこのことが、ブリュージュの生命の諸条件に混乱を引き起こさずにはいなかった。けれども、すでに見たことだが、事態の直接の帰結であるワルヘレン島の投錨地の発展は、ブリュージュの地位の性格に深刻な変化をもたらすことはなかった。つまり、ブリュージュは、従来通り商人を引き寄せつづけたのである。商人に航海者という性格よりとりわけ経済的な利害の性格を見出す点では、大方の一致するところである。要するに、ブリュージュに向けられた商品の輸送のための主要な入口がうまくいっていないということは、新しい事実ではなかったのである。たとえ、13世紀と14世紀の驚異的な発展を妨害しなかったのだとしても、そのことが1500年ころの破局を誘発した原因であるとはとても考えられないのである。それは、フランドルのこの市場の衰退に補助的な役割を果たしたことはおそらく考えられることである。しかしながら、この役割は、比較的脇役程度の役割しか果たさなかったのである。これと同じ観点で、エスコ河畔の勝利を得た競争相手（アンヴェルスのこと、訳者）の状態を検討してみれば、この点を重要なことと結びつけることはないであろう。

アンヴェルスの水路の状態は、今日まで、十分注意を引きつけてはこなかった。現実には、ブリュージュと同様の世界市場であるアンヴェルスもまた、その繁栄の期間中、重要な意味を持つ一つの港であったわけではない。取引所で取引される積み荷を積んだ船舶の大部分はアルネムイデンに投錨した。というのは、この都市の水路は、海上船舶にはきわめて限られた一部しか受け入れることはできず(4)、そしてワルヘレン島とブラバントのこの港との間を往復するはしけに対する以外には停泊地を提供しなかったのである。アンヴェルスの優越性というのは、1542年から1545年、1551年から1554年にかけてのネーデルラントの輸出の動向のなかで圧倒的なものとなって現れる。この時代に対して、われわれは、統計的な大きさを有する豊富な情報を持っている(5)。そのかわりに、われわれは、アンヴェルスからスペインへの直接出港——われわれはそうのように理解しているが——は1542年に36隻しかなかったことを知っている(6)。輸出商品は、はしけに乗ってアンヴェルスの停泊地を出たことは明らかなことで、次いで、それらが実際の目的地に向けて遠洋船舶に積み替えられたのは、ゼーラントにおいてであったということである。

ところで、スヴィンがこの時期に完全に航海から見捨てられたと考えるのは誤りである。たしかに、アンヴェルスの引力は強力なものであって、ネーデルラントの他の諸港を完全に無視させるほどの壮麗さによって眩惑されてしまうほどのものである。15世紀と16世紀のはじめの三分の二世紀

の間、スヴィンの諸港のうちで航行できるものとして残った唯一の港——これは常にブリュージュ市場と相互に結び付きを有していたが——スリュイスは、定期的に遠洋船舶を迎え入れていた(7)。交易の収支は、そこでははっきりとした輸入超過であった(8)。とはいえ、われわれが本稿での観点からすれば、この貿易の性格はほとんど問題になることはない。ブリュージュの荒廃が生じたあとも長いこと、このスリュイスの港が外国の商船隊を完全に受け入れることができたということを認めることが重要なことなのである。これよりもっと重要なことは、16世紀において、スヴィンの水路体系を修理するために、精力的な努力が払われたことである。この努力は、多くは満足すべき結果をもたらした(9)。1565年に、イングランドとブリュージュの間で、その本拠を奪われたイングランドの羊毛のステーブルを、したがってカレーの陥落(1558年)後、ブリュージュのなかに置くということについて重大な交渉がもたれたということは、以上の事実を特色づけるものである(10)。事実上、この交渉は、成功裡に終わった(11)。こうした状況は、港湾の条件がアンヴェルスとスリュイスとの間の基本的な相違の原因ではないこと、また当時の人々がこの要因に大きな意味を与えていなかったことをも示すものである。それにかわって、この要素は、諸市場の役割に介入した諸変化に決定的な力を及ぼすものでなかったと結論できる。もし、この要素がないとしたならば、ゼーラントは、アンヴェルスはもとよりとしてブリュージュの外港として役割を果たしつづけたことになるであろう。

第二の説明の試みは法的な秩序に根拠を有するものである。これまでは、ブリュージュとアンヴェルスとの間に商業の自由について存在したきわめて明確なコントラストを語ることで満足してきた(12)。このフランドルの都市が都市の時代の反外国人立法の経済政策のなかで奮起しつづけたのに対して(13)、ライバルのブラバントの都市(アンヴェルスのこと、訳者)は、国際貿易の利害により有利なコスモポリタン主義へと意を決して向かっていった。こうした説明は、半世紀にわたってアンヴェルスに住み、1589年にその地で没したかの有名なフィレンツェの貴族グイッチャルディーニによって主張されたところである(13)。この著者は、『ネーデルラント地誌』のなかで、彼の居住地について絶賛辞を与えているのであるが、彼のいうところでは、ここ以外では、これほどの自由は存在しなかった(14)。これら二つの都市の商業施設を比較してみると、このフィレンツェ人のいうことの誇張に光を当てないで済ませるわけにはいかない。また彼の著作に論拠を有する議論の価値に大きな傷を与えないで済ませるわけにもいかないのである。

ブリュージュ市によって外国商人に課されたすべての義務のなかで、市場権が最も面倒なものであったようである。この特権によって、「それが何であるにせよ、それを買い、また売るためにスヴィンに来訪者をもつすべての方法」がブリュージュにもたらされなければならなかった。その例外は、この強制的市場が、この都市の外港のどちらかで定められたいくつかの商品のみであった(15)。この権利は、法的な次元において、その繁栄の期間のこと都市の経済的な優位を確立したのであった。ブラバントがこの点に猛然と固執したことは用意に理解される。15世紀末に、この都市がこれらの商人コロニーをその昔の居住地に戻らせることができるという希望をもって、この特権を何回



か確認させた<sup>(16)</sup>。とはいえ、これが商人の動きの自由を、実践においてどれほど妨げてきたのかは問題である。それは、ゼーラントにその積み荷を残すことを妨げるものではなかったらしい。同様に見本取引の出現は、その効果のかなりの部分をそれから取り上げたことになり、また、品格という一条項の価値のみをそれに残すことになった。それゆえ、それが課した制約は、現実のものというよりは理論的なものであったと思われるのである。

商人の法的な状況を検討すれば、共通した見解とは反対に、ブリュージュがこの点で一つの政策——他の商業都市の制度に比較して、断固として自由なものである筈の政策——を推進したと確言できる。13世紀の中葉以後、この政策の進展をあとづけることは可能である。当初は、この状況はこのフランドル都市においてとも他と同様であった。しかしながら、少しずつこの都市は外国人の顧客に譲歩をしていった。1307年以降になると、経済封鎖の驚異につづいて<sup>(17)</sup>、ドイツ人は一市民の参加にすぎることなくして、彼らの間でその商業活動をおこなう権利を獲得したのである<sup>(18)</sup>。南欧人の取引の主要な舞台である香料市場の規制は、外国人間での小売を禁止した。彼らは、卸の商品を直接取引する権利を、暗にそれによって認めたとのである<sup>(19)</sup>。他方で、他の領域では、行商人に小売取引さえ開いていたのであった。1360年には、ハンザは居酒屋を開き、この地で彼らのブドウ酒の小売をする特権を与えられた<sup>(20)</sup>。周知のように、外国人間の直接取引の禁止と小売の禁止、それに中世の商都市で市民の法的・経済的な地位の土台は、ブリュージュにおいては、さほど厳格に適用されてはいなかった。西洋のよその取引場にあつては、外国人に、これほどの程度の経済的な自由を全体として保証した場所を一つとして探せるところはないのである。

外国行商人の取引の第三の規制の要素、つまりブリュージュで獲得された商品のその場での転売の禁止は、これもまたここではかなり弱められていた。14世紀末において、この禁止は、ドイツ人コロニーによつてもはや求められることはなかった。この禁止を、1398年に確認したのは都市当局ではなくて、ハンザ居留民の当局であった<sup>(21)</sup>。この直後に、他方でヴェネツィア人は40年来スヴィン川に投錨してこの共和国のガレー船の船中で買った商品をこの場で転売する権利さえ持っていた<sup>(22)</sup>。仲立制度はブリュージュにあつては、西洋の大部分の商都市におけるよりも、かなり自由であった。よそでは、これら仲立人は、その職務を、外国人の取引を犠牲にしてその市民の取引を好遇することを業務とする公的な職務に転換させることができる大権を与えられていることがよくあった<sup>(23)</sup>。ブリュージュでは、反対に、14・15世紀にあつては、このような仲立人の公的な職能の痕跡を決して見出すことがない。彼らの活動は、現代それらがそうであるものにかかなり近いのであって、契約当事者間の公平にして利害関係のない仲裁であった。また、よそでと同じく、たとえ彼らの仲介が任意のものでなく強制力を持つものであったとしても、仲介は、商人に、取引の過程で、以前は切り離しえなかった無限に数多くの納付金の一つ、これまた取引をさほど角には妨害したとは思われない納付金を一つ支払うよう強制する別の目的を持つだけであった<sup>(24)</sup>。

ブリュージュの政策は、この点については、軽微といわれるほどの徴税によって補完されていた。市場税として徴収された税は取るに足らぬものでしかなく<sup>(25)</sup>、また14世紀の過程で市の消費税はま

すまず減額していったし、また外国諸国民のほとんどに有利に完全に割引されていた<sup>(26)</sup>。1477年に、マリー・ド・ブルゴーニュの到来に当たって宣言され、また1488年にオーストリアのマクシミリアンの摂政下の市自治主義の反動は、この立法の自由な精神の一つの交替を記しているというのは事実である<sup>(27)</sup>。これらの出来事の、プリュージュの衰退が重大な相貌をもって現われたのとこれらの出来事が一致したのははげしく歴史家の心を打つものであった。これらの出来事の貿易の推移に対する影響は有益なものである筈がなかったのは明白なことである。しかし、出来事の影響力が現実に決定したのであろうか。それゆえ15世紀の初め以来、この反乱のかなり以前から、そしてこの時期のプリュージュの政治の自由な性格にもかかわらず、いくつかの国際貿易上の分岐がアンヴェルスに向かってスヴィンの河岸を離れていたという事実を考へうるかどうか、あえて断言するのはむずかしい。要するに、最近、16世紀においてさえ、商人の『近代的な』メンタリテと未だ中世諸原理と伝統に完全に浸された経済生活上のこの都市の組織との間でアンヴェルスにおいて支配的であった奇妙な差異を際立たせてくれるのである<sup>(27)</sup>。アンヴェルスがこのようにプリュージュと大きく違うとしたら、それは、この都市がそれについて負ったところの都市政策によるというよりは、商業上の代表者の人格により以上負っているのである。それは、このライバルのフランドルの都市のそれと著しく似ているのである。それゆえ、中世末の国際貿易の構造変化に生じた変化については、水路上の状況に対するよりも大きな影響力をこれに付与することは不可能なことである。

最後に、きわめて最近になってからだが、ネーデルラントの経済的な重心と呼びうるものの移転によって、これらの諸変化を説明しようとしてきた<sup>(28)</sup>。事実、ブラバントは経済的な強度の活動においてフランドルのあと1世紀おくれて目覚めたにすぎない。外国貿易と輸出工業とはそこでは13世紀までは、真の重要性をもつことはなかった。しかし、もしアンヴェルスの場合を正確に考慮に入れなければ、この経済的な開花が中世において比較的短い期間にしかすぎなかったことがただちに注目することは好ましいことである。工業においては、その衰退は、14世紀末以後フランドルと同時に起こった。貿易については、それはますますアンヴェルスの驚異的な吸引力によって支配されていったが、これは、その活動の類似している点でその兄弟とさえあえて呼ばれている都市、ベルゲン・オブ・ゾーム市を凌駕するまでになった<sup>(29)</sup>。ブラバント全体のなかで、アンヴェルスは、この公国の人口の動きのなかではっきりとした強いタッチで映った著しい例外をなした。これは、14世紀末の第二四半紀と15世紀はじめの第一三半紀の間に著しい拡大を記したことはあらそいがたい<sup>(30)</sup>。さらにいえば、この進展は、この公国の他の地域のなかでというよりはこの地域に、アンヴェルスにおいてとりわけ示されたのであった。フィリップ善良公の治世下（1419年 - 1467年）において、この公国の地位は、ほとんど変わることがなかったのである。ただ、ブリュッセルとアンヴェルスのみが前進をしたが、前者は、公爵の宮廷の存在によるものであり、後者は、まさしくその効果を取らせはじめるところの貿易の発展によってであった。15世紀末の三分の一においては、アンヴェルスの壮麗さの時期をそのころに特定している時代にはブラバントの開花に立ちあうことからはほど遠く、後退こそが一般的なのであった。ただもう一度いうが、その経済がエスコーの首府

の経済に密接に結びついていたところのアンヴェルスやボワ・ル・ダックの地域のみがその例外であった<sup>(31)</sup>。明らかに様々な諸要素が公国内のよそでは感取させない一つの力をアンヴェルスに及ぼしたのである。この都市の繁栄は、ブラバントの残りの領域内には進展しなかった原因に、また少なくとも16世紀に至るまではその衰退を止めることさえできなかったところの諸原因にこそよるのであった。この時期にその点で驚くべき逆転がみられるのである<sup>(31)</sup>。アンヴェルスの壮大さはこのことの結果ではなく、反対に諸原因の一つであったのだ。逆に、この公国の経済全般はエスコアのこの市場の経済に支配的な影響を及ぼすことはなかったということ、そして、また他の諸要因こそが継続的なこの開花（アンヴェルスの繁栄のこと、訳者）を説明するのに求められるべきであると結論づけられるだろう。

〔原注〕

- (1) われわれは本研究を、より一層研究に発展させる意図をもったデッサンとしてのみ考えることにしよう。その理由は、われわれは、研究の多様な諸側面を相互に明らかにしうる刊行物の完全な展開を目指すことができないと考えたからである。同じ様にわれわれはここでは未刊行史料を利用することも断念した。
- (2) H.ブリンク『ネーデルラントとその住民』第1巻、485-487、アムステルダム、1892年、3巻（H.Blink, *Nederland en zijne bewoners*, t. I, 485-487, Amsterdam, 1892, 3 vol.）R.ブランシャール『フランドル。フランス、ベルギー、ホラントにまたがる平野の地理的研究』191-200 [リール]、1906年（R. Blanchard, *La Flandre géographique de la plaine flamande en France, Belgique et Hollande*, 191-200 [Lille] , 1906.）
- (3) H.ファン・ウェルフェーケ『経済史』206-208（再出の場合は文献表題の省略をおこなう。以下、同）；A. Dデ・スメット『スヴィン港の起源』；ブランシャール『フランドル』192以下。14世紀半ば以前のフィレンツェ人のフランチェスコ・バルドゥッチ・ペゴロッティ（Francesco Balducci Pegolotti）が書いた記述は最も示唆に富むものである。「ブリュージュの海港は、すなわちスリュイスであって、これは港の一つの都市であり船乗りの町であって、ここに全て商人は船か車で、ガレー船かそれとも別の船団で荷を運び、積み荷をおろす。スリュイスの町とブリュージュ市に入るにはダムと呼ばれる町に入る。ダムという町はブリュージュからスリュイスに至る小さな河がある。この川で全ての商人が小さな船で往来する」《Il porto di mare di Bruggia si è alle Schlusse, che è una villa che è alla marina del mare del porto di Bruggia, ove tutta la mercatantia si carica e scarica nelle nave o coche, o galee o altri navili...; entra la villa delle Schluse e la villa di Bruggia si à una villa che si chiama il Damo, la quale villa del Damo si è un sun una picciola rivera che va da Bruggia alle Schluse, per la quale rivera tutta la mercatantia va e viene per piccoli navill...》A.エヴァンズ編『商人実践録』（アメリカ中世学会、刊行物、24巻）、239、ケンブリッジ（マサチューセッツ）、1936年（*La pratica della Mercatura*, ed. A. Evans (The Medieval Academy of America, Publ,no24), 239, Cambridge (Mass.), 1936.）
- (4) ゴリス『南欧商人』169。この都市の古文書館に保存され、ゴリスによって再録された、1515の日付を有するアンヴェルス停泊地の正面鳥瞰図を見られたい。
- (5) 同上書、321-337。及び部分的には、L.ファン・デア・エッセン『カール5世時代のアンヴェルス港の歴史とネーデルラントのスペイン・ポルトガル向け輸出交易研究』（ベルギー王立考古学アカデミー叢書、3巻、1921年、39-64）（L. van der Essen, 'Contribution à l'histoire du port d'Anvers et du commerce d'exportation des Pays-Bas vers l'Espagne et le Portugal à l'époque de Charles-Quint' *Bulletin de l'Academie Royale d'Archéologie de Belgique*, t. III, 1921, 39-64.）
- (6) ゴリス、同上、193。

- (7) フィノー 『フランドル・スペイン間の商業関係』 217-224、および232、のなかに挙げられたデータ。及び L.ジリオド・ファン・ゼフェレン 『海港ブリュージュ。主に16世紀におけるこの問題の状態についての歴史的研究 (フランドル歴史・古代研究教育会年報、第5篇、第7巻、1894年)』 (L.Filliodts van Severen, Bruges port de mer. Etude historique sur l'état de cette question principalement dans le cours du XVIe siècle (*Annales de la Société d'Emulation pour l'Etude de l'histoire et des Antiquités de la Flandre*, 5e série, t.VII, 1894, 73, 74, 175 note 2 et 215 note 1)。この時代のスペイン船について注目される点、つまり相当な大きさについて。ゴリス 『南欧商人』 143-146。
- (8) フランス領フランドル自体は、スヴィンに近接していたもののその販路をアンヴェルスを経由して広げていた。E.コールネール 『かつての製造業中心地。ホントスホーテのサーイ織毛織物工業 (16-18世紀)』 237-239、パリ、1930年 (E. Coornaert, *Un centre industriel d'autrefois. La draperie-sayerterie d'Honschote (XVIe-XVIIIe siècle)*, 237-239, Paris, 1930)。これに対して、それ (フランス領フランドルのこと、訳者) は、アンヴェルスの大きさにもかかわらずネーデルラントにおけるその産物の中心的市場となっていたブリュージュで羊毛を購入した。同上、193。
- (9) ジリオッド、『海港ブリュージュ』 3-540。
- (10) O.デ・スメット 『ブリュッヘにおける経済的友好時代におけるアントウェルペンのイングランド・ナツイ』 (ネーデルラント歴史雑誌、第1巻、1936年、27-54。) (O. de Smedt, 'De Engelse natie te Antwerpen in het tijdvak der economische conferentie te Brugge', dans *Nederlandsche Historiebladen*, t. I, 1936, 27-54.)
- (11) E. E. リッチ 『ステーブル商人勅令簿』 33-34、ケンブリッジ、1936年 (E. E. Rich, *The Ordinance Book of the Merchants of the Staple*, 33-34, Cambridge, 1936)。
- (12) 例えば、ピレンヌ 『ベルギー史』 第2巻、第3版、436-440、を参照。
- (13) この規制については次を参照。H.ピレンヌ、[G.コーエン、及びH.フォション] 『11世紀から15世紀の西洋文明 (グロツ編纂 『一般史』 中 『中世史』 第8巻、153、パリ、1933) (H. Pirenne, [G. Cohen et H. Focillon] *La civilisation occidentale du XIe au milieu du XVe siècle (Histoire générale, publ. s. dir. de G. Glotz, Histoire du Moyen Âge, t. VIII)*, 153, Paris, 1933)。
- (14) L.グイッチャルディーニ 『低地地方、別名低地ケルマニア全地誌記述』 プリンケプス社、アンヴェルス、1567年 (L.Guicciardini, *Descrittione di tutti i Paesi Bassi... altraments detti Germania Inferiore...* Ed. princeps, Anvers, 1567, in-fol) (以下本訳では、『ネーデルラント地誌』と略記する、訳者)。われわれの言及は、1581年版による。この著作の完成は1559年であったことに注意。E.ファン・エフェン 『ルイ・グイッチャルディーニ』 『国民伝記集』 第8巻、422、ブリュッセル、1883年-1885年 (E. Van Even, 'Louis Guicciardini,' dans *Biographie Nationale*, t. VIII, 422, Bruxelles, 1883-1885.)
- (15) 『ネーデルラント地誌』 150-158。
- (16) ジリオッド 『ステーブル』 第1巻、158, no 233 (1324)。
- (17) 同上、『目録』 第6巻、246 no 1203; 『ステーブル』 第2巻、257, no 1235 (1487)、291 no 1279 (1493)、316 no 1304 (1498)。
- (18) W.フリッキウス 『14・15世紀ハンザ農業政策としての経済戦争』 (ハンザ歴史雑誌、57巻、1932年、38-77、及び 58巻、1933、52-121) (W. Friccius, 'Der Wirtschaftskrieg als Mittel hansischer Politik im 14. und 15. Jahrhundert' (*Hansische Geschichtsblätter*, t. LVII, 1932, 38-77 et LVIII, 1933, 52-121) は残念ながらこのハンザの最初の封鎖を論じていない。
- (19) 『ハンザ原史料』 第2巻、52, no 121 § 2 「(そこでは) 相互に、あるいは誰でも売ったり買ったり、商なうことができるのだ」《*vendere, emere et mercandizare possint invicem seu contra quascunque alias personas*》(全フランスについてのロベルト・ド・ベチュンの特許状)。とくにブリュージュについては、1309年の都市特許。同上書、65, no 154 § 2。
- (20) 1304年の日付を有するこの規則は1470年の確認に含まれている。ジリオッド 『目録』 第6巻、6 no 1107

及び L.A. ヴァルンケーニッヒ・A.グレルドルフ 『1305年に至るまでのフランドル、及び市民・政治制度』 第4巻、346、ブリュッセル、1835年-1864年、5巻 (L.A.Warnkönig et A. Gredorf, *Histoire de la Flandre et de ses institutions civiles et politiques jusqu'à l'année 1305*, t. IV, 346, Bruxelles, 1835-1864, 5 vol.)

- (21) 『ハンザ史料』 第3巻、243 no 495。
- (22) 同上書、第5巻、161 no 311。
- (23) ジリオッド 『ステーブル』 第1巻、221、no 298 (1358)。
- (24) 私の論文で、中世における仲立制度 (courtage) の当初の性格についての全体的な概観を与えようとしたことがある。「中世の仲立制。西洋ヨーロッパの商業制度の起源と特質」 『フランス及び外国法歴史雑誌』 4 篇、15巻、1936年、105-141。' Les courtiers au moyen âge. Origine et caractéristiques d'une institution commerciale en Europe occidentale ' (*Revue Historique de Droit Française et Etrangère*, 4e sér., t.XV, 1936, 105-141.)
- (25) この問題に関して、われわれは未刊行ではあるが、ブリュージュの学位論文で仲立ち制度について史料を引き出すことが出来る。
- (26) ジリオッド 『目録』 全篇。1307年にハンザ商人は彼らの承諾なしには以後もはや新たな関税に服す必要がないとの権利を獲得した。『ハンザ史料』 第2巻、52, no 121 § 3。
- (27) この種の規定は外国ナシオン (nations) に対する大部分の特許状に見出されるところである。ジリオッドの刊行史料を参照。
- (28) ピレンヌ 『ベルギー史』 第2巻、3版、14-16 及び 220-221。
- (29) E.コールネール 「資本主義システムの生成。16世紀アンヴェルスの資本主義と伝統的経済」 『経済社会史年報』 8巻、1936年、127-139、(E.Coornaert, ' La genèse du système capitaliste: grand capitalisme et économie traditionnelle à Anvers au XVIe siècle ' (*Annales d'Histoire Economique et Sociale*, t. VIII, 1936, 127-139.)
- (30) H.ファン・ウェルフェーケ 『経済・社会史』 (フランドル史、4巻、1936年)、285-287。
- (31) ネーデルラント王国のベルゲン・オブ・ゾーム、ブレダ行政区の北ブラバントのこと。J.コルネリッセン 『15世紀ベルゲン・オブ・ゾーム史より』 (レイデン学位論文) ハーグ、1923年) (J.Cornelissen, *Uit de geschiedenis van Bergen-op-Zoom in de XVIe eeuw* (thèse de Leyde) La Hage, 1923) 参照。ここではベルゲン・オブ・ゾームの発展を論じようとは考えていない。国際的な交易の到来については当然のことであるが、アンヴェルスと同じ状況の下で生じたことである。
- (32) 正確には1374年から1437年の間。
- (33) ボワ・ル・ダックは、低地ラインとアンヴェルスの間にあって、北にはカンピーヌのヒース産地を回る主要な陸路上に位置していた。
- (34) 人口データ全体については次のものを参照。J.クヴェリール 『ブラバント人口統計 (14・15世紀)』 (王立歴史委員会刊行物、ブリュッセル、1912年) (J.Cuvelier, *Les dénombrements de foyers en Brabant (XIVe-XVe siècle)* (Publications de la Commission Royale d'Histoire, sér.in-4, Bruxelles, 1912), 全篇。及びとくに232ページのグラフ参照。

アンヴェルスの繁栄の諸要因のなかには、この都市が外的な要因ではなく、それ固有の住民の活動によってそうなっているという意味で、内在的およびうるものがある。『偉大な世紀』の開花がアンヴェルスの市民の先行する世代の努力の結果でなかったのかどうかは検討する必要がある。ところで、この要素の影響力が比較的に重要性が少なくなかったということは認められるところである。アンヴェルスには、毛織物工業が存在した(1)。とはいえ、どう考えてもこの毛織物工業がフランドル伯領内での、またブラバント南部地方さえこの繊維工業史を特徴づけるほどの目立った発展



を経験したことはなかったと考えられる。アンヴェルスに作られた他の工業としては、ニシンの樽詰め工業があげられるが、これはこの都市によって執拗に追求された塩と魚の市場権政策によって優遇されたのである(2)。この活動は、明らかに、この都市の経済的浸透の視点からして、現実的な意味をもつものであったことは明らかである。13・14世紀においては、アンヴェルス市民はブラバントの主要な市場において彼らの魚を販売していたのであり(3)、また次の世紀には、ケルン商人がアンヴェルスに燻製ニシンを大量に買いに来ていた(4)。そうはいっても、まず第一にアンヴェルス市民の積極的交易も、いかなる意味においても、国際的な市場の誕生を説明するものではありえないものである。第二に、アンヴェルスのニシン市場を北部ネーデルラントのそれと比較すれば、それがスヘルデのものよりも比較にならないほど重要な役割を演じたことは明らかなことである(5)。だから、それらの北ネーデルラント諸州の競争者がある一方で、比較的目立たない役割しか演じえなかった工業と交易がアンヴェルスの国際的大交易の位置づけにおいて決定的な役割を演じたということはあるようにもいえないことである。

これに対して、もう一つのアンヴェルス経済の要素である大市は、われわれの研究にとって、より重要な意味をもつ。アンヴェルスには二つの自由な大市があった。一つは、パンテコテ、もう一つは聖バフォン(10月1日)である。前者は、ベルゲン・オブ・ゾームの復活祭で開かれる大市に直接つづいていて、後者は、同じ都市(ベルゲンのこと、訳者)に設立された聖マルタン大市(11月11日)に先行するものであった(6)。これらの人々の集会(大市のこと、訳者)の歴史の初めは、定かなものとはなっていない。この制度の創設年月を特定することはできない(7)。われわれが知りうる、最も古い記載は、1360年までさかのぼる(8)。しかしながら、それ以上にはるかに古いことは疑いない。13世紀以来、アンヴェルスはハンブルクやケルンの商人に訪問されていた(9)。後者(ケルン商人、訳者)の存在は、大市以外において、ネーデルラントの他の地域と同様に、アンヴェルスの補給にとって不可欠のライン、ワインの貿易によって明らかなことである。けれども、ハンブルクの商人——彼らに対してブラバントのアンリ3世がアンヴェルスの市場税の支払い条件を1267年に決めた——は、大市の訪問者ではなかったのではない。この時期の、ブラバント、とくにアンヴェルス地域がそうであったような比較的遅れていた地域の交易活動において、これらの制度が大きな役割を果たしていたことを考えあわせると、この事実は、もっともなものであると見てくる。それがどのようなものであったとしても、仮にアンヴェルスの大市の時代を無視したとしても(大市の存在を考えれば、ということ、訳者)、その地で取引される商売の性格について多少とも知ることができる。あらゆる点からみて、大市がその初発において西洋中世の大部分の大市——それらはとくにその地の人々に、外国の商品を用意し、その固有の農業・工業生産物売り捌くのに便利な機会を与える任務をもっていた——と同様のものではなかったとを想定せざるをえないのである(10)。

このような大市の影響力の及ぶ範囲は、史料が不完全な状態ではあるものの、それについて判断する限りでは、この時代にブラバント公国を、またある範囲では、スヘルデ川流域をはみ出ること

はなかったようである。1358年と1359年にルイ・ド・マーレ伯爵は、ネーデルラントのいくつかの地方の脂肪性物質の指定市場権をアンヴェルスに与えるよう様々な方策を講じた<sup>(11)</sup>。この特権は、アンヴェルス地域の食糧供給の規則性については有利に作用したが牧畜経済の観点からするとたしかにきわめて不利に作用し、しかしそれでも、ここでも地域的な利害以上のものを見たいのである。たとえ、1425年に、プレーメンの商人がアンヴェルスの大市で1頭の馬を販売したことがあったとしても、この事実は、相当程度の範囲をもつ市場の存在を意味するものではなかったのである。他方でわれわれは、彼が乗用馬の多くを売ったのがブリュージュであったことを知っている<sup>(12)</sup>。実際のところ、原料について言えば、アンヴェルスでは、遅くとも14世紀の末からその規模を知るのはむつかしいものの、羊毛取引がおこなわれていた<sup>(13)</sup>。とはいえ、ネーデルラントが有した毛織物工業のきわめて活発なこの中心地においては、羊毛交易がきわめて数多く存在したこともたしかである。羊毛の販売は、他方で皮革や毛皮取引によっても凌駕されたようである。当初から、もう一つ別のかなりの繁栄を経験したと思われる土着の産業が存在した<sup>(14)</sup>。14世紀の末以後になると、さまざまな証拠がこの取引の存在を証言しているが、この取引には、イングランド人のほかに、バルト海のハンザ都市の商人が主に関与していた<sup>(15)</sup>。実際のところは、15世紀に入らずと以前までは、積み荷はまだブリュージュに到着し、そこからエスコの大市に送られていた<sup>(16)</sup>。とはいえ、この積み荷は15世紀の初め以後にもなると毛皮市場のようにすでにかかなりの遠隔地にまで達するものであった。この時期にブリュージュのハンザ・コロニーが採用していた、アンヴェルスとベルゲン・オブ・ゾームにおける年2回の大市に赴くという慣行が説明されるのは、このような状況下においてであることはほとよりのことである。たしかに、この集団は、毛皮が優勢を占める商売においてバルト海商人によって成り立っていた<sup>(17)</sup>。1409年にはユトレヒトの毛皮商人が、その地で原料の調達をするために、これらの大市をしばしば訪れている<sup>(18)</sup>。徐々に、大市の引力は大きなものになっていって、商人はブリュージュに毛皮をもっていくことを怠るようになった。アンヴェルス市場が、明らかに最も繁盛するようになっていて、この点でその先行者の損失を引き起こしていたのである。1465年以後になると、ブリュージュ市民でさえ、彼自身の工業に必要な原料を求めにそこに赴くようになっていた<sup>(19)</sup>。

こうした事実は、決定的な項目として、アンヴェルスによるブリュージュの廃位を意味するものとなった。しかしながら、このことから、早まった結論を引き出して誤ってはならない。いずれにせよ、毛皮取引は、たしかに比較的に拡がりをもった地理的範囲の職人のみに関係したものではなかったが、とはいえ、これは国際的と呼びうるようなものでもなかった。人はこの国際的という性格を、買い手が売り手に対して外国人である市場、そこで商品がさらに国——この地方的工業の経済圏に属していない——に再輸出されるべく輸入されているといった市場にのみ認めることが可能である。ところでアンヴェルスが毛皮取引において優勢さを獲得していったのに対して、この優勢は、この発展とは無関係に、真に決定的な性格をもったところの別の転換をこうむった。つまり、イングランド人とケルン商人の結び付きの下で、通過的な国際大貿易がそこに打ち立てら

れたという結果がついていったのである。

〔原注〕

- (1) F.プリムス『アントウェルペン史』第2巻第2分冊、36-52、第3巻、88-96、第4巻第1分冊、156-159、第5巻第2分冊、5-10、第6巻、第2分冊、34-36、アンヴェルスーブリュッセル、1927年以後 (F.Prims, *Geschiedenis van Antwerpen*, t.II, fasc.2, p.36-52; t.III, p.88-96, t.IV, fasc.1, p.156-159, t.V, fasc.2, p.5-10, t.VI, fasc.2, p.34-36, Antwerpen-Bruxelles, depuis 1927)、及び同『アントウェルペンの毛織物工業の第一世紀、1226年-1328年』(アントウェルペン古文書報、新編、第3巻、1928年、p.105-149) ('De eerste eeuw van de lakennijverheid te Antwerpen 1226-1328', (*Antwerpsch Archievenblad*, Nouv. sér., T.III, 1928, p.105-149)。これらの著作は諸規制や他の同類の史料に依拠している。他方で、保存されているものだが、しかし、とりわけ輸出については、アンヴェルスの毛織物工業の現実の重要性を示していない。H. ラウレント『中世の輸出交易。フランス、及び南欧でのネーデルラントの毛織物工業 (12 - 15世紀)』は、バルドッチ・ペゴロティに依って、アンヴェルスの毛織物が1340年頃、ナポリやコンスタンチノーブルにあったと声明する。
- (2) プリムス『アントウェルペン史』どこでも、特に第4巻、1分冊、128-131。
- (3) 同上書、第2巻第2分冊、122 以下 (*Ibid.*, t. II. fasc. 2, p.13ss.)。
- (4) B.クスケ『14世紀から17世紀のケルンノ魚交易』(『歴史・文化西ドイツ雑誌』第24巻、1905年、p.227-313) (B. Kuske, *Der Kölner Fishhandel vom 14. bis zum 17. Jahrhundert* (*Westdeutsche Zeitschrift für Geschichte und Kunst*, t. XXIV, 1905, p.227-313)。及び
- (5) N.ゴツチャルク『中世低地ドイツ地域の漁業と魚交易 (ケルン学位論文)』40-41、バード・ヴェリスホーフエン、1927年 (N.Gottschalk, *Fischereigewerbe und Fischhandel der niederländischen Gebiete im Mittelalter* (diss.Cologne)), 40-41, Bad Wörthshofen, 1927 はわれわれには、アンヴェルスの実際の重要性を見誤っているように思われる。
- (6) P.ジェナール『アンヴェルス全時代史』第2巻、409、ブリュッセル、1888年、2巻 (P.Génard, *Anvers à travers les âges*, t.II, 409, Bruxelles, (1888), 2vol.) ; コルネリッセン『ベルゲン・オブ・ゾーム史』66。
- (7) ベルゲン・オブ・ゾームについては、大市はその日付を有する特許状が示すように、1365年に設立された。C.スロートマンス『ベルゲン・オブ・ゾームの大市と南ネーデルラントからの訪問者』シント・ゲルトロード史料、1935年、5 (C.Slootmans, *De Bergen op Zoomsche jaarmarkten en de bezoekers uit Zuid Nederland* (Extr. *Sinte Gertruidbronne*) s.l.n.d. [1935] 5)。
- (8) この時代、フランドル伯爵ルイ・ド・マール、アンヴェルス辺境伯はこの都市の大市を訪問するすべての商人に通行証を与えている。『ハンザ史料』第3巻、249、ノート1。
- (9) プリムス『アントウェルペン』第2巻第2分冊、108-111。
- (10) ピレンヌ『中世における西洋文明』87以下。
- (11) ホラント伯については『ハンザ史料』第3巻、173、ノート4を、ユトレヒト、1366年に確認された特権については、同上書、クスケ編第4巻、75、195番、227、462番を、(ゼーラント、フランドル、及びエノー・カンブレシスのポルダーの乳製品取引を確保するドルトレヒト、ミデルビュルフ、ガン、ヴァランシエンヌについては) 227、ノート1番を参照。
- (12) コップマン編『ハンザ史料 1256年-1430年』第7巻、556、no 801 § 44。
- (13) クンツェ編『ハンザ原史料』第4巻、436、ノート2 (1390年)。
- (14) アンヴェルスについては、プリムス『アントウェルペン史』第3巻、96-99;第4分冊、155; 第6巻第2分冊、24-29。未だ存続しているこの産業はブラバントのカンピーヌ、とくにボワ・ル・ダックにその主要な中心地を有していた。とはいえ、F. ファン・フェルホーヴェン『ス・ヘルトヘンボッシュの都市と農村』H. Van Veltoen, *Stad en Meierij van's Hertogenbosch*, Amsterdam, 1935-1938, 2 vol. では言及されていない。

- (15) 例として次のものを参照。『ハンザ原史料』第4巻、クンツェ編、443、1006番（1390年）、5巻、106、ノート1（1395年）；第8巻、シェタイン編、282、422番（1455年）、及び『ハンザ判告書、1431年-1476年』、フォン・デア・ロップ編、第3巻、314、369番（1448年）。
- (16) 「1432年に、ハンザの商人であるウィンリク・ファン・マンステードとヨハン・スクエレンボルヒはブリュッヘ市内で、アントウェルペンで売りに出すために2樽のなめし毛皮を調達した」《So hadden int jar [14] 32 Winrik van Manstede und Johan Scuelemborch, copplude van der hense, hir bynnen Brugge geschepet...umme to Antwerpen in den markt to vorende, twe vate werks eft pelletrie》, 同上, 第1巻、329 no 397 § 42 及び、340、no 396 § 42。
- (17) 1418年に、ブリュージュのフランドル当局との会計交渉が中断したが、その理由は、「アントウェルペンの商人がその市場にいたからである」コップマン編『ハンザ判告書、1256年-1430年』第6巻、601、606番（1418年）；「アントウェルペンの市場は近隣にあるが、フランドルからこの市場へ赴くものはめったにいない」『ハンザ判告書、1431年-1476年』フォン・デア・ロップ編、第4巻、335、471番（1456年）。次も参照、第2巻、297、373番（1440年）、及び第5巻、90、159番（1461年）。
- (18) クンツェ編『ハンザ原史料』329、397番 §42及び、340、398番。
- (19) 1465年に、騎士のローランド・メッテネイはブリュージュに毛皮を輸送した。同上、スタイン編第8巻、135、no 227。その5年後ブリュージュの靴製造人が毛皮をその地で購入した。ジリオッド『ステーブル』第2巻、187-188、no 1131。

〔訳注〕

大市は、foire, fair, jaarmarkt の訳で、「歳市」、「定期市」とも訳す。国際、遠隔地交易の結節点として定期的に開催された市場。